

十月の末

宮沢賢治

青空文庫

嘉ッコは、小さなわらぢをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろへて、ふっふっ息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしてゐます。

嘉ッコのお母さんは、大きなけらを着て、縄なはを肩にかけて、そのあとから出て来ました。「母が、昨夜ゆべな、土あ、凍しみだぢやい。」嘉ッコはしめつた黒い地面を、ばたばた踏みながら云いひました。

「うん、霜あ降つたのさ。今日は畑あ、土あぐぢやぐぢやづがべもや。」と嘉ッコのお母さんは、半分ひとりごとのやうに答へました。

嘉ッコのおばあさんが、やつぱりけらを着て、すっかり支度をして、家の中から出て来ました。

そして一寸手ちよつとをかざして、明るい空を見まはしながらつぶやきました。

「爺ぢんごあ、今朝も戻て来ないがべが。家えであこつたに忙いしよがしでば。」

「爺ぢんごあ、今朝も戻て来ないがべが。」嘉ッコがいきなり叫びました。

おばあさんはわらひました。

「うん。けづな爺^ぢんごだもな。酔^よたぐれでばがり居^ゐで、一向仕事助^すけるもさないで。今日も町で飲んでらべあな。うなは爺^いんごに肖^にるやないぢやい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ツコはもう走^{はし}つて垣^{かき}の出口の柳の木を見てゐました。

それはツンツン、ツンツンと鳴いて、枝中はねあるく小さなみそさゞいで一杯でした。実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にほんのすこしゆれ、そのてつぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩の電気菓子^かのやうな白い雲が、静に翔^かけてゐるのでした。

「ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン。」

みそさざいどもは、とんだりはねたり、柳の木のなかで、じつにおもしろさうにやつてゐます。柳の木のなかといふわけは、葉の落ちてカラツとなった柳の木の外側には、すっかりガラスが張^はつてあるやうな氣がするのです。それですから、嘉ツコはますます大よろこびです。

けれどもたうとう、そのすきとほるガラス函^{はこ}もこはれました。それはお母さんやおばあさんがこつちへ来^きましたので、嘉ツコが「ダア。」と云ひながら、両手をあげたものです。

から、小さなみそさざいどもは、みんなまるでまん円になって、ぼろんと飛んでしまったのです。

さてみそさざいも飛びましたし、嘉ッコは走って街道に出ました。

電信ばしら

「ゴーゴー、ガーガー、キイミイガアアヨオワア、ゴゴー、ゴゴー、ゴゴー。」とうなつてゐます。

嘉ッコは街道のまん中に小さな腕を組んで立ちながら、松並木のあっちこっちをよくよく眺めましたが、松の葉がパサパサ続くばかり、そのほかにはずうとはづれのはづれの方に、白い牛のやうなものが頭だか足だか一寸出してゐるだけです。嘉ッコは街道を横ぎって、山の畑の方へ走りしました。お母さんたちもあとから来ます。けれども、この路ならば、お母さんよりおばあさんより、嘉ッコの方がよく知つてゐるのです。路のまん中に一寸顔を出してゐる円いあばたの石ころさへも、嘉ッコはちゃんと知つてゐるのです。厭あきる位知つてゐるのです。

嘉ッコは林にはひりました。松の木や櫓ならの木が、つんつんと光のそらに立つてゐます。林を通り抜けると、そこが嘉ッコの家のだんご畑でした。

豆ばたけは、今はもう、茶色の豆の木でぎっしりです。

豆はみな厚い茶色の外ぐわいたう套すうを着て、百列にも二百列にもなつて、サツサツと歩いてゐる兵隊のやうです。

お日さまはそれのうすぐもにはひり、向ふの方のすゝきの野原がうすく光つてゐます。

黒い鳥がその空の青じろいをはてを、なゝめにかけて行きました。

お母さんたちがやつと林から出て来ました。それから向ふの畑のへりを、もう二人の人が光つてこつちへやつて参ります。一人は大きく一人は黒くて小さいのでした。

それはたしかに、隣りの善ぜんコと、そのお母さんとにちがひありません。

「ホー、善コオ。」嘉ツコは高く叫びました。

「ホー。」高く返事が響いて来ます。そして二人はどつちからもかけ寄つて、丁度畑さかひの堺さかいで会ひました。善コの家うなの畑も、茶色外套の豆の木の兵隊で一杯です。

「汝うないの家さ、今朝、霜降つたが。」と嘉ツコがたづねました。

「霜あ、おれあの家さ降つた。うないの家さ降つたが。」善コが云ひました。

「うん、降つた。」

それから二人は善コのお母さんが持つて来た蓆むしろの上に座りました。お母さんたちはうし

ろで立つて談^{はな}してゐます。

二人はむしろに座つて、

「わあああああああ。」と云ひながら両手で耳を塞^{ふさ}いだりあけたりして遊びました。ところが不思議なことは、「わああああんあああ。」と云はないでも、両手で耳を塞いだりあけたりしますと、

「カーカーコココー、ジャー。」といふ水の流れるやうな音が聞えるのでした。

「ぢや、汝^{うな}、あの音あ何の音だが覺^{おぼ}だが。」

と嘉ツコが云ひました。善コもしばらくやつて見てゐましたが、やつぱりどうしてもそれがわからないらしく困つたやうに、

「奇体だな。」と云ひました。

その時丁度嘉ツコのお母さんが畦^{あぜ}の向ふの方から豆を抜きながらだんだんこっちへ来ましたので、嘉ツコは高く叫びました。

「母^が、かう云^ゆにしてガアガアど聞えるものあ何だべ。」

「西根^{にしね}山^{やま}の滝の音さ。」お母さんは豆の根の土をばた落しながら云ひました。二人は西根山の方を見ました。けれどもそこから滝の音が聞えて来るとはどうも思はれません

でした。

お母さんが向ふへ行つて今度はおばあさんが来しました。

「ばさん。かう云いにしてガアガアコーコーど鳴るものあ何だべ。」

おばあさんはやれやれと腰をのぼして、手の甲で額を一寸ちよつとこすりながら、二人の方を見て云ひました。

「天あまの邪鬼しやぐの小便しょうべの音さ。」

二人は変な顔をしながら黙つてしばらくその音を呼び寄せて聞いてゐましたが、俄にはかに善ぜんコがびつくりする位叫びました。

「ほう、天の邪鬼の小便あ永いな。」

そこで嘉ツコが飛びあがつて笑つておばあさんの所に走つて行つて云ひました。

「アツハツハ、ばさん。天の邪鬼の小便あたまだ永いな。」

「永いてさ、天の邪鬼あいつも小便、垂れ通しさ。」とおばあさんはすまして云ひながら又豆を抜きました。嘉ツコは呆あきれてぼんやりとむしろに座りました。

お日さまはうすい白雲にはひり、黒い鳥が高く高く環わをつくつてゐます。その雲のこつち、豆の畑の向ふを、鼠ねずみ色の服を着て、鳥打をかぶったせいのむやみに高い男が、なにか

たくさん肩にかついで大股おほまたに歩いて行きます。

「兵隊さん。」善コが叫びながらそつちへかけ出しました。

「兵隊さんだない。鉄砲持つてないぞ。」嘉ツコも走りながら云ひました。

「兵隊さん。」善コが又叫びました。

「兵隊さんだない。鉄砲持つてないぞ。」けれどもその時は二人はもう旅人の三間ばかりこつちまで来てゐました。

「兵隊さん。」善コは又叫んでからをかしな顔をしてしまひました。見るとその人は赤ひげで西洋人なのです。おまけにその男が口を大きくして叫びました。

「グルルル、グルウ、ユー、リトル、ラズカルズ、ユー、プレイ、トラウント、ビ、オッフ、ナウ、スカッド、アウヰイ、テウ、スクール。」

と雷のやうな声でどなりました。そこで二人はもうグーとも云はず、まん円になって一目散に逃げました。するとうしろではいかにも面白さうに高く笑ふ声がします。向ふの方ではお母さんたちが心配さうに手をかざしてこつちを見てゐましたが、やがて一寸おじぎをしました。二人は振り返つて見ますとその鼠色の旅人も笑ひながら帽子をとつておじぎをして居をりました。そして又大股に向ふに歩いて行つてしまひました。

お日さまが又かつと明るくなり、二人はむしろに座ってひばりもゐないのに、

「ひばり焼げこ、ひばりこんぶりこ、」なんて出鱈目^{でたらめ}なひばりの歌を歌ってゐました。

そのうちに嘉ッコがふと思ひ出したやうに歌をやめて、一寸顔をしかめました、俄かに云ひました。

「ぢや、うないの爺^ぢんごあ、酔つたぐれだが。」

「うんにや、おれあの爺^ぢんごあ酔つたぐれだない。」善コが答へました。

「そだら、うないの爺^ぢんごど俺あの爺^ぢんごど、爺^ぢんご取つ換へだらいがべぢやい。取つ換へないどが。」嘉ッコがこれを云ふか云はないにウンと云ふくらゐひどく耳をひっぱられました。見ると嘉ッコのおぢいさんがけらを着て章魚^{たこ}のやうな赤い顔をして嘉ッコを上から見おろしてゐるのでした。

「なにしたど。爺^ぢんご取つ換へるど。それよりもうなのごと山山のへっぴり伯父^{をぢ}さ呉^けでやるべが。」

「ぢさん、許せゆるせ、取つ換へないはんで、ゆるせ。」嘉ッコは泣きさうになってあやまりました。そこでぢいさんは笑つて自分も豆を抜きはじめました。

※

火は赤く燃えてゐます。けむりは主におぢいさんの方へ行きます。

嘉ツコは、黒猫くろねこをしつぽでつかまへて、ギツと云ふくらゐに抱いてゐました。向ふ側ではもう学校に行つてゐる嘉ツコの兄さんが、鞆かばんから読本とくほんを出して声を立てて読んでました。

「松を火にたくゐろりのそばで

よるはよもやまはなしがはづむ

母が手ぎはのだいこんなます

これがゐなかのとしこしぎかな。第十三課……。」

「何したど。大根なますだど。としこしぎがなだど。あんまりけづな書物だな。」とおぢいさんがいきなり云ひました。そこで嘉ツコのお父さんも笑ひました。

「なあにこの書物あ儉約教へだのだべも。」

ところが嘉ツコの兄さんは、すっかり怒つてしまひました。そしてまるで泣き出しさうになつて、読本を鞆にしまつて、

「嘉ッコ、猫おれさ寄越せぢや。」と云ひました。

「わがないんちや。厭やんたんちや。」と嘉ッコが云ひました。

「寄越せつたら、寄越せ。嘉ッコお。わあい。寄越せぢやあ。」

「厭やんたあ、厭やんたあ、厭やんたつたら。」

「そだら撲はだぐぢやい。いゝが。」嘉ッコの兄さんが向ふで立ちあがりました。おぢいさんがそれをとめ、嘉ッコがすばやく逃げかかったとき、俄にはかに途方もない、空の青セメントが一ぺんに落ちたといふやうなガタアツといふ音がして家はぐらぐらつとゆれ、みんなはぼかつとして呆あきれてしまひました。猫は嘉ッコの手から滑り落ちて、ぶるるつとからだをふるはせて、それから一目散にどこかへ走つて行つてしまひました。「ガリガリツ、ゴロゴロゴロゴロ。」音は続き、それからバアツと表の方が鳴つて何か石ころのやうなものが一散に降つて来たやうすです。

「お雷らいさんだ。」おぢいさんが云ひました。

「雹ひょうだ。」お父さんが云ひました。ガアガアツと云ふその雹の音の向ふから、

「ホーオ。」となりの善コの声が聞えます。

「ホーオ。」と嘉ッコが答へました。

「ホーオオ。」となりで又叫んでゐます。

「ホーオオ。」嘉ツコが咽喉のど一杯笛のやうにして叫びました。

俄にはかに外の音はやみ、淵ふちの底のやうにしづかになつてしまつて氣味が悪いくらゐです。

嘉ツコの兄さんは電を取らうと下駄げたをはいて表に出ました。嘉ツコも続いて出ました。空はまるで新らしく拭ふいた鏡のやうになめらかで、青い七日ごろのお月さまがそのまん中にかゝり、地面はぎらぎら光つて嘉ツコは一寸ちよつと氷砂糖をふりまいたのだとさへ思ひました。

南のずうつと向ふの方は、白い雲か霧かがかかり、稲光りが月あかりの中をたびたび白く渡ります。二人は雀すずめの卵ぐらゐある電の粒をひろつて愕おどろきました。

「ホーオ。」善コの声がします。

「ホーオ。」嘉ツコと嘉ツコの兄さんとは一所に叫びながら垣根の柳の木の下まで出て行きました。

となりの垣根からも小さな黒い影がプイツと出てこつちへやつて参ります。善コです。嘉ツコは走りました。

「ほお、電だぢやい。大きぢやい。こつたに大きぢやい。」

善コも一杯つかんでゐました。

「俺家おうちのなもこの位あるぢやい。」

稲づまが又白く光つて通り過ぎました。

「あ、山山のへつぴり伯父をぢ。」嘉ツコがいきなり西を指さしました。西根の山山のへつぴ

り伯父は月光に青く光つて長々とからだを横たへました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十月の末

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>